



鹿角市の「地域おこし協力隊」の活用とOB・OGの活躍について

木村 幸樹

(鹿角市 総務部政策企画課 鹿角ライフ促進班 主査)

鹿角市は、北東北三県のほぼ中央に位置し、十和田八幡平国立公園に代表される数多くの景勝地や温泉郷などの観光資源に恵まれているほか、夏は全国規模の駅伝大会、冬は国体やインターハイ・インカレ等の全国規模のスキー大会が毎年のように開催され、数々のオリンピック選手を輩出し「スキーと駅伝のまち」を標榜しています。

また、1300年の歴史をもつ「大日堂舞楽」、日本三大囃子のひとつで豪華絢爛な「花輪ばやし」、北海道・北東北の縄文遺跡群の一つである「大湯環状列石」に加え、令和4年には「毛馬内の盆踊」がユネスコ世界無形文化遺産登録となり、市内に4つの世界遺産を有する「文化のまち」という一面もあります。

《移住・定住施策の推進と地域おこし協力隊》

鹿角市は、昭和47年に3町1村の合併により誕生しましたが、合併前の昭和30年に6万人を誇った市域人口は、世界有数の鉱山であっ

た尾去沢鉱山の退潮により急激に減少が進んだほか、高度経済成長期やバブル経済期には首都圏等への人口流出が続き、現在の人口は3万人を割り込むなど、地域活力の衰退が危惧されてきました。そこで、移住・定住施策の積極的な推進として、平成27年度より地域おこし協力隊制度を活用し、人口減少への対策を進めてきています。

《移住コンシェルジュの役割》

鹿角市で活躍する地域おこし協力隊は、他の自治体のように一次産業や観光、まちづくりなどの様々なミッション毎に活動するのではなく、全員が移住・定住支援に特化した「移住コンシェルジュ」として活躍しており、市ではこれまでに11人を採用しています。

移住コンシェルジュは、自らが都市地域からの移住者という視点で、市民や市職員が気付かない鹿角市の魅力や暮らしについて、SNS等を活用して積極的に情報発信しています。また、



(花輪ばやし)



(毛馬内の盆踊)

鹿角市の魅力を体験できる移住体験ツアー等の企画、移住支援制度の提案、首都圏等で開催される移住相談会へ参加など幅広い活動をしており、先輩移住者として同じ目線に立って親身に移住相談に応じるとともに、定住に向けたフォローアップなども行っています。

特に情報発信については、首都圏等の外部に向けたPRだけでなく、広報紙などを活用し、市民に向けて移住者からみた鹿角市の魅力を伝えることにも取り組んでおり、郷土愛やシビックプライドの醸成に非常に有効だと感じています。市内の小中学校では「総合的な学習の時間」において、移住者から鹿角市の魅力を聞き取り、学ぶという内容の授業が活発に行われており、毎年隊員が講師として各学校へ派遣され、子どもたちの郷土愛の醸成に一役買っています。

《県内トップクラスの実績は移住コンシェルジュとNPO法人かづのclassyの存在あり》

平成27年度の取り組み開始から、今日までに、移住コンシェルジュを通じた移住者数は238世帯390人となり、順調に増加し続け、県内でもトップクラスの実績となっています。鹿角市の取り組みの特徴は、地域おこし協力隊を「移住コンシェルジュ」として活用していることと、退任したOB・OGが「NPO法人かづのclassy（クラッシィ）」を立ち上げて活動していることの2つにあると考えています。

本稿では、現役で活躍する移住コンシェルジュ2名と、「NPO法人かづのclassy」についてご紹介したいと思います。

《動画を用いた新たな取り組み》

眞鍋 雄次（まなべ ゆうじ）さん

令和2年4月に着任した眞鍋さんは、四国地方の香川県より奥さんと中学生・小学生のお子

さんの4人家族で鹿角市に移住されました。

緑もゆかりも無い東北地方に興味を持ち、地域おこし協力隊を活用した地方移住を検討していた中で、鹿角市の移住コンシェルジュ募集が目にとまり応募された眞鍋さんですが、採用面接時から自身の特技であるYouTubeを活用した情報発信などについて積極的に提案されていたのが非常に印象的でした。

折しも、眞鍋さんが着任したのは新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、首都圏を中心に緊急事態宣言が幾度も発出されていた時期でした。首都圏等での移住相談会やフェアは全て開催中止が続いたほか、鹿角市が売りとしていた移住検討者の要望に応えるオーダーメイド式の移住体験ツアーや、お試し住宅の利用なども全て休止せざるを得ないなど、これまでの隊員と比べ活動範囲が非常に制限される最中の着任でした。しかし、この状況を逆手に取って、市が手薄に感じていた「映像コンテンツ」の充実を自ら提案し、鹿角市初の公式YouTubeチャンネルを開設しました。

眞鍋さんは、鹿角市の一番の魅力は「人」だと感じており、移住者に限らず市内のキーマンを取材対象に、「人を伝える」ということをコンセプトとした動画づくりを行い、田舎暮らしや移住者の暮らしぶりなど、生の声を移住検討者へ訴えかける活動を行っています。

また、コロナ禍においても実施にこぎつけた移住体験ツアーでは、部外者の立ち入りが制限される子育て施設等で、事前に日常の様子を撮影し、ツアー参加者限定の動画を配信するなど、現地ツアーと映像を用いたバーチャル体験というハイブリッド式のツアーの開催方法を確認しました。

また、市が運営する空き家バンクでは、県外との往来が制限された内覧希望者に対し、物件

の様子はもちろんのこと、立地状況や近所の風景、アクセスする道路や街並みなどを動画で提供するなど、コロナ禍においても移住促進の流れを止めない取り組みにまい進して頂きました。

このほかにも、近隣市町村の地域おこし協力隊と連携し、各隊員の地域で地元食材を活用したスイーツ教室を開催し地域の活性化を図る取り組み「COK's(コックス)」に初期メンバーとして参加するなど、市域を超えたコミュニティづくりや地域おこし協力隊の周知活動も精力的にこなしています。

隊員としての活躍だけにとどまらず、お子さんの部活動の親の会会長を務めるなど、プライベートでも学校行事や地域活動に積極的に参加され、地域内でも貴重な存在となっています。

そんな真鍋さんも令和5年3月末で3年の任期を終え、地域おこし協力隊を退任する予定ですが、退任後も鹿角市に引き続き定住することはもとより、現在住んでいる地域の活性化を目指した取り組みを模索しています。これと並行して、前職である自動車整備士の資格と経験、ミュージシャンの趣味と実益を兼ねて、市内初となるカーオーディオ専門店の起業を目指し、準備を進めています。



(住民との交流の場である公衆浴場にて)

《経験とキャラクターを生かした活動》

高橋 朋恵（たかはし ともえ）さん

高橋さんは令和4年5月に秋田市より着任しました。前職のハウスメーカー勤務の際に、県北エリア担当として訪れるうちに鹿角市を気に入り、かつ地域おこしに興味を持ち応募された方です。すでにお子さんも成人されており、子育てはもとより親の介護などのライフステージを積み重ねた経験から、幅広い相談に対応できるのが彼女の強みとなっています。そして、何よりも明るく気さくな性格が、移住相談者のみならず、受け入れ側となる市内の企業や事業者、市民の方などにも慕われ、人の繋がりが大切である移住コンシェルジュという役職では最大限の威力を発揮しています。

市では近年、人口構造の若返りと労働人口の獲得に良いインパクトをもたらす移住者層として「ひとり親」に着目し、一般社団法人日本シングルマザー支援協会と連携した取り組みを行っています。これはのびのびとした子育て環境を求め地方移住に興味のある協会のシングルマザーを対象に、県内トップクラスを誇る子育て環境や子育て支援制度を実際に体感してもらうほか、子育てしながらでも働きやすい職場や実際の仕事を見学することで、移住者の呼び込みに繋げる取り組みです。

3年目となる令和4年8月のオンライン移住相談会及び移住体験ツアーでは、着任して間もない高橋さんが主担当となり、ツアー行程の企画、地元企業や受け入れ団体との調整などを行いました。子育て経験者の目線や女性ならではの細やかな気配りなどがツアー行程にしっかりと反映されており、参加者から大変好評を得たほか、ツアー終了後も、参加者同士で作成したSNSのコミュニティグループへ招待され、現在も移住実現に向けた相談に乗るなど、非常に

厚い信頼を寄せられています。

また、前職の経験を生かすべく提案されたのが、空き家バンクの利活用向上に向けての魅力を発信する取り組みです。鹿角市では市の空き家バンクの登録物件を成約した移住者に対して、リフォーム費用を最大100万円補助する制度があり、相当数の利用実績がありますが、着工の前後を比較するような情報はこれまで一切提供していませんでした。高橋さんからは、「リフォームによるビフォー・アフターの見比べができれば、より中古住宅を選択する動機付けに繋がるのではないか」、「自身の専門知識を用いて快適な住環境の整備を手助けしたい」と提案があり、高橋さん自らが本補助金の交付決定者と工務店の担当者へ直接掛け合い、実際のリフォーム前後の見比べを公式SNSにて配信しています。水回りの使い勝手や動線など、主婦ならではの視点からアドバイスをしているほか、初めての雪国生活を過ごすIターン移住者などには、雪国での快適な生活のためのリフォームや、節電や生活コストの低減を目指した家づくりの提案など、これまでに無い新たな視点を持った相談窓口として期待をしているところです。

着任間もない高橋さんですが、退任後は鹿角市へ定住し起業することを検討しており、市内外の様々な研修にも積極的に参加しています。



(地ワイン取材時のワイナリーにて)

《元気ハツラツ！ NPO法人かづのclassy》

鹿角市の地域おこし協力隊において特徴的なのは退任後の定住率の高さです。これまで9人の退任者のうち、現在も鹿角市内に定住しているのは6人で、定住率は県内平均を大きく上回っています。それぞれが定住して、起業や就職をしながら活動しているのが「NPO法人かづのclassy」です。ご存じのない方でも県内在住の方であれば、毎週土曜日の夕方に某大手清涼飲料メーカーが提供する週間天気予報の背景映像として、世界無形文化遺産の花輪ばやしや毛馬内盆踊り、特産品の松館しぼり大根の収穫など、多くの子どもや地元住民が笑顔で出演しているテレビコマーシャルの主演として登場しているといえ、わかる方も多いのではないのでしょうか。地域の「元気ハツラツ！」をテーマに、各都道府県を代表する団体が選定されているこのコマーシャルにおいて、秋田県の代表として制作会社より直接オファーを頂き、3年を超えた現在も引き続き放映されています。

同法人は、移住コンシェルジュのOB・OGが中核となり、市民や市民団体、事業主などを巻き込み、主に移住サポートや定住支援、地域活性化に資する活動を行うことを目的に設立されました。

代表となる理事長の木村芳兼(きむら よしかね)さんと事務局長の松村託磨(まつむら たくま)さんは、初期の移住コンシェルジュとして、また、スタッフの勝又奈緒子(かつまた なおこ)さんと菅原由紀子(すがわら ゆきこ)さんは2期目の移住コンシェルジュとして務められ、退任後も鹿角市に定住し、「かづのclassy」の業務を精力的に行っています。



(かづのclassyのメンバー)

《市と連携した事業展開》

「かづのclassy」では、大きく分けて、市からの受託事業と法人独自事業の2つの事業を展開しています。

活動の中心となるのが、鹿角市が委託している移住促進業務と関係人口の創出や拡大に関する事業です。

鹿角市では平成30年度のNPO法人化をきっかけに、市が地域おこし協力隊（移住コンシェルジュ）を活用した移住促進事業をより強力に促進することを目的に、同法人へ一部業務を委託し、市（現役隊員）とOB・OGが連携した事業展開を行っています。

具体的には、法人の活動拠点である築140年を超える古民家「kemakema(ケマケマ)」での移住相談員を配置した移住相談窓口の開設、首都圏に出展する移住フェアや相談会への同行、鹿角市で行う移住体験ツアー等でのアテンドの連携や、空き家バンクの物件登録業務などを委託しています。

市役所が閉庁している土日や祝日などでも、移住相談を行う体制づくりとして開設した相談窓口は、移住して間もなく知り合いのいない移住者の拠り所としても機能しており、移住者間の交流や地域住民との繋がりづくりなど、定住サポートとしても認知されています。移住フェア等のブースでは移住コンシェルジュとともに、

先輩移住者としての経験から、子育て環境や地域コミュニティの様子など、リアルな「鹿角ライフ」をお伝えしていることが相談者から好評を得ています。

また、平成30年度に総務省の関係人口創出モデル事業として採択された、鹿角市の関係人口創出の取り組みである「鹿角家（かづのけ）」においては、市と関係人口との中間支援団体として、交流イベントや関係性の深化を狙った体験ツアーなどの企画運営、SNSを活用した情報発信などの事業を行っているほか、市内の小中学校の授業へ移住コンシェルジュと共に講師として毎年招かれるなど、その取り組みや団体の知名度は年々高まっています。

このほか、農水省の農業体験事業の秋田エリアにおける企画運営の受託、秋田県からは県内の地域おこし協力隊の研修事業や、中核団体設立のための研修事業など、毎年様々な事業を受託しているほか、秋田県地域おこし協力隊OB・OGネットワークの主要メンバーとして、現役隊員の相談対応など全県的な活動も多く行っています。

《地域に根差した法人の独自活動》

「かづのclassy」のもう一つの大きな活動が法人の自主財源で行っている独自活動です。

ホテル観賞会にお寺でのBBQや花火大会、八幡平ドラゴンアイ観賞トレッキング、法人会員のセミプロのカメラマンを講師にした風景写真講習など、市の魅力を移住者に体感してもらう様々なイベントを実施しています。これらのイベントは、地域や各種団体を巻き込んで行われており、移住者間交流のみならず、地域住民との交流機会を提供することでコミュニティづくりにも役立っています。

また、「かづのclassy」の主要メンバーの全

員が子育て世帯であることから、子育て世帯の交流の場創出を目的とした、子ども服リサイクル事業も行っています。子どもの成長によりサイズが合わなくなった服や日用品などの提供を募り、数百円という低額な料金設定や定額詰め放題企画などを行うことで、新しい利用者へ引き継がれる循環型社会の形成に寄与しています。

「kemakema」は、子ども連れでも通いやすいように、部屋の一部をクッションフロア化して落書き黑板を設置したキッズスペースに改修し、子どもが安全に遊べる場所を設けたほか、団体会員のヨガ講師によるキッズヨガ等の親子イベントも多く開催し、ママ友づくりや家族交流の場として好評を得ています。

人の流れが安定してきたことから、長年構想として温めていた事業で令和4年度に新たに始めたのが、無料の職業案内事業です。これは、HPやSNS等の情報周知ツールを持たない個人農家や小規模事業者などから、一時的な繁忙期の人手不足に悩んでいるという声が寄せられていたことと、隙間時間や休日などに単発で収入を得たい主婦などからの要望があったことの、双方の声から生まれた事業です。「kemakema」に求人募集用の掲示板を設置し、募集者はそこに必要事項を記載したカードを掲示します。これを、「かづのclassy」がフォーマットに入力し自分たちのSNS等を通じて周知するほか、施設利用者が直接カードを持ち帰ることも可能です。多くの目に触れることから、すでに数件のマッチング実績が出ています。

また同じく令和4年度途中から新規事業として開始したのが、「kemakema」の農泊事業です。市が委託する関係人口事業の「鹿角家」における拠点整備の一面もありますが、築140年の古民家がもつ魅力を最大限に活用する取り組みとして各種法規制に対応する改修を行い、令和4

年秋に宿泊ができる古民家としてオープンにこぎつけました。基本的には素泊まりですが、オプションとして土間スペースを利用して行うBBQや、法人会員を講師にきりたんぼ鍋づくり体験やそば打ち体験、餅つき体験などが用意されています。

「かづのclassy」らしいと感じるのは、利用者を施設内に留めずに地域内を巡回させる仕組みづくりを行っているところです。食事は歩いてすぐの商店街等の近隣飲食店を、入浴については周辺の温泉を案内しており（「kemakema」にバスタブはありません）、ついでに商店街やスーパーなどで朝ご飯の食材を買ってもらうなど人の流れを作り出し、古民家を拠点に自分たちの活動エリアである地域を活性化したいという思いが強く伝わる取り組みです。

様々な事業を通じて、活動拠点「kemakema」には、月平均40人以上、多い月には100人を超える来訪者があり、人が集う場所やコミュニティ空間として成果が見え始めています。

これらの地域活動は域内でも認知度が向上し、令和3年には、秋田銀行様より地域課題に取り組む団体等に対する「住みよい地域社会の実現に向けた活動支援」事業による寄付を頂いたほか、地元の鹿角警察署より団体として一日署長を依頼されるなど、法人独自の活動が高く評価されています。



(活動拠点となる古民家「kemakema」)

《専従職員はおらずメンバー全員が マルチワーカー》

これほどの事業を展開している「かづのclassy」ですが、専従職員はおらず全員が他に本職を持つマルチワーカーです。

代表である理事長の木村芳兼さんは、市内の社会福祉法人で広報担当として働き、法人価値の向上（ブランディング）に取り組んでいるほか、デザイン・WEB制作等を行う「月と山社」を起業しています。社会福祉法人が市から受託している高齢者向けの福祉入浴施設には、おしゃれなカフェを設置したほか、コワーキングスペース等を設けることで、若者も集う場として好評のようです。

事務局長の松村託磨さんは、隊員時代に県のビジネスプランコンテストで優秀賞となった燻製の製造を生業にすべく、「燻製屋 猫松(くんせいや ねこまつ)」を立ち上げました。看板商品の燻製ナッツや燻製チーズのほか、地元野菜を使った燻り大根・燻り人参などの製造・販売も手掛けており、市内の道の駅では常に上位の売り上げを誇り、最近では秋田市内や都内の飲食店からも引き合いがあるほどです。

スタッフの勝又奈緒子さんは、スマート農業を行うミニトマト農家の従業員を基本に、地元コミュニティFMのパーソナリティーとして、同じくスタッフの菅原由紀子さんは、隊員時代に取得した国内旅行業取扱資格を活用し、市内の観光DMOで観光商品の企画や運営を行うほか、資格を生かし自身もツアー添乗員として、それぞれ子育てをしながら活躍しています。

《永続的な発展を目指して》

地域おこし協力隊制度は全国でも広く認知され、多くの自治体で活用されていることから競争が激しく、鹿角市を含め各自治体では隊員の採用に苦戦しています。任用形態や賃金、活動内容のほか、着任する地域自体の魅力が比べられる中で、退任後も引き続き地域おこしに取り組める組織・仲間である「NPO法人かづのclassy」の存在は大きな強みです。しかし、今後隊員の採用が続いていかないと、「かづのclassy」の新陳代謝が進まないということも懸念されます。

鹿角市の協力隊員間で代々引き継がれている言葉として、「協力隊員が楽しそうにしていなければ、移住者は来ない」という言葉があります。今後も現役隊員と「かづのclassy」が連携し、様々な取り組みを通じて元気な姿を発信し続けられるように、行政として支援と伴走をしながら、更なる移住者の呼び込み、地域おこし協力隊の活躍、「かづのclassy」の新陳代謝という好循環を生み出すような仕組みづくりを行っていきたいと思います。



(青垣の山々と鹿角盆地)